

パーソンズとハウゼン 両者の「美的発達」の5段階」の比較

○パーソンズの理論 美的経験の認知発達に関する研究

以下のパーソンズに関する記述は彼の著書『HOW WE UNDERSTAND ART -A cognitive developmental account of aesthetic experience』(Cambridge university press)1987、をもとに翻訳編集したものである。

(1)プロフィール

マイケル・パーソンズ (Michael J. Parsons) は 1935 年、イギリスに生まれた。オックスフォード大学で英文学を学んだのち 1963 年、米国へ渡り、イリノイ大学で教育哲学を修めている。パーソンズの関心は人がいかに美術を理解するようになるのかということにあり、その過程を解明することにあった。1950 年代半ばから起こった認知科学は 70 年代には大きな潮流となったが、その認知革命の洗礼を受けたパーソンズは、美的経験を認知発達の側面から明らかにしようとした。

彼の研究は 1987 年に『HOW WE UNDERSTAND ART -A cognitive developmental account of aesthetic experience』としてまとめられ大きな反響を呼んだ。ゲッティ財団からの支援を受けて「生命中心教育」(Life-centered education)という理念のもとに、美術を中心とした統合的カリキュラムの開発に取り組む。オハイオ州立大学名誉教授、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校客員研究教授。

(2)研究の動機

鑑賞に対するパーソンズの基本的な考え方は、「美術を見るということは頭で理解すること」という言葉に凝縮されている。美術を見るということは自然を見るのとはわけがちがう。美術を見るという行為は、感情や感覚による行動と一義的に考えるのではなく、知性や理解に関わる事象である。このように考えたパーソンズが、認知発達理論に基づいてその変化を探ろうとしたのは当然のことなのかもしれない。

つまり認知には、経験的なものと道徳的なもの、美的なもの三つがあるという考えが研究の基盤にある。ハーバーマスがいうように、これら三つの認知は三つの異なる世界に対応しており、それぞれ事物の外的世界、社会的な規範の世界、自我の内的な世界に関与しているというわけである。ピアジェが外的世界に関する理解の発達を研究したように、コールバーグが道徳判断の発達に関する研究をしたように、パーソンズは人の美的発達に関してその内的世界の発達を解明しようとしたのである。

(3)研究過程

1970年代からインタビュー法による調査研究が始められたが、その対象者は必ずしも厳密に選ばれたものではなかった。対象者は大学のあるソルト・レイク市やその近郊に住む人たちであり、幼児のように数の限られる場合は、インタビュアー自身の子どもや友人の子どもが対象となったように、折り合いのつく人を片っ端からインタビューしたと述べている。

インタビューに際しては、議論の取っ掛かりとなるいくつかの質問が用意されている。観衆が絵について考えていることを探る指針となるこれらの質問は、たとえば次のようなものである。

- 1 この絵について話してください。
- 2 何が描いてありますか？
- 3 この絵を見てどのように感じますか？
- 4 色彩についてはどうですか？いい色だと思いますか？
- 5 形についてはどうですか？質感についてはどうですか？
- 6 これは難しい絵でしたか？何が難しかったのですか？
- 7 これはいい絵ですか？どうしてそう思いますか？

これらの質問例を見ると、被験者の判断や思考、想像を導き出す「開かれた質問」で構成されていることが読みとれる。

これらの質問によって導かれた答えをパーソンズは四つの観念から考察した。《モチーフ》、《感情表現》、《媒体・フォルム・様式》、《判断の性質》の四つである。この四つは人々が絵を見るときに抱く関心を包括しており、彼らの発言でこのどれかに分類されない答えはないという。

パーソンズはこれら四つの観念の集合として、五つの段階を想定した。段階は観念の集合であり、個人の特性ではない。人々は絵を見るためにこれらの観念を用いるが、段階という枠組みを設定することによって、人々の見方がどのように変化していくかを知ることができる考えたのである。

パーソンズの考えは、発達段階説を唱えたJ・ピアジェの理論に基づいている。発達とは、スキナーの主張のように条件づけられた行動が蓄積され連続的に進んでいくものではなく、人は外界からの情報を同化と調節によって獲得するとピアジェは考えた。人は自分の認知の枠組みによって外界の情報を処理するが（同化）、それでうまくいかない場合は認知構造を変化させて受け入れようとする（調節）。つまり発達というものは、認知構造の変化が生じるある時期に飛躍的な変化が訪れ、段階的に変化するものだとして捉えている。外界に能動的に働きかけることによって理解が生まれると考えたピアジェは、それを四つの段階で構想した。発生的認識論とも呼ばれるピアジェの発達段階説は、よく知られているよう

に、次の4段階である。

- ・ 感覚運動段階(Sensory-Motor Stage) : 0-2 歳
- ・ 前操作段階(Preoperational Stage) : 2-7 歳
- ・ 具体的操作段階(Concrete Operation Stage) 7,8 歳-11,12 歳
- ・ 形式的操作段階(Formal Operation Stage) : 11,12-14 歳

ただしパーソンズは、ピアジェの4段階でもなく、コールバーグによる道徳性の発達段階の0～6段階でもなく、5段階で発達をとらえている。

ある段階の観衆がその前の観衆よりよく絵を理解できるとみなす根拠を、パーソンズは美学と心理学に置いている。新しい知見を得ることが深い解釈につながり、その段階ごとに美学的により理解が適切になっていく。またそれぞれの段階は、認知発達のスキーム（しくみ・体系）と同じ次元にある、他者の見方を取り入れる能力の増大に依拠している。

つまりパーソンズの段階理論は、さまざまな認知発達と同様、社会性の成長が美的理解の発達の土台であると捉えているのである。

パーソンズの美的経験の認知発達の5段階

第1段階 お気に入り(favoritism)

第1段階の特徴は、好きな色に強く惹きつけられたり、モチーフから思いのままに連想したりして、絵に直感的な喜びを感じることである。彼らは色彩を好み、色数が多いほどよい絵であると思う。彼らは絵のモチーフ、つまり何が表されているかに気づいてはいるが、連想や思い出を自分の見方のなかに自由に取り入れる。この段階に共通する特徴は、モチーフと関連のあるなしに関わらず、こころに浮かんだことを何でも喜んで受けとめることである。

心理学的には、他者の見方をほとんど意識しない段階である。すべては自分の経験のなかで起こり、ほかには何もなく、比べるものは何もない。

美学的に言えば、絵は快い経験を与える刺激である。何が表されているかとか、あるいは絵が非具象的であろうともそれは問題ではない。

第2段階 美とリアリズム (beauty and realism)

第2段階ではモチーフに注目する。絵の目的は何かを描き表すことと捉えている。だから、モチーフが魅力的でリアルに描かれていればよい絵であると思う。写実が評価され、技能、根気、慎重さが賞賛される。ほほえみや身ぶりから感情を感じ取ることができる。

心理学的にいえば、暗黙のうちに他者の見方を考慮に入れている点で進歩している。見えているものとそこから想起するものの識別ができ、人が絵から連想することが必ずしも他者が見るものとは一致しないことを理解する。

美学的に第2段階が進歩しているのは、何が描かれているかと、そこから想起するものを識別できるからである。

第3段階 豊かな表現力 (expressiveness)

第3段階は、表現力に着目する。絵をみるときに得られる経験が強烈であればあるほど、おもしろければおもしろいほどその絵はよい絵である。

芸術の目的はある人間の経験を表現することであると捉える。モチーフの美は副次的なものとなり、表現されたものが重要であると思う。同様に写実的な様式や技術はそれ自体が目的ではなく、それらは表現手段と理解する。だから、非写実的な様式や技術のほうがよいと思うことがある。つまり創造性や独創性、感情の深さなどが新たに評価されるのである。しかしその判断基準は個人的な経験の質に依存している。

心理学的には、第三段階は他者の見方や考え方について理解が進む点で進歩している。個人の経験が内面的で独自のものであるという気づきも深まる。

美学的には、作品の許容範囲をさらに広げることができるようになる。

第4段階 様式とフォルム (style and form)

この段階では、作品の意味は個人的というよりは、社会的に獲得されるものだということに気付く。作品の意味とは、それを見る集団がとりとめなく語り合うことによって成り立っており、これは個人によって単に内的に理解されたこと以上のものである。解釈は正され、改善されうるのである。

心理学的には、この段階の進歩は、伝統という視野を用いる能力にある。

第5段階 自律 (autonomy)

この段階の中心となる考え方は、人は伝統によって築かれた作品の意味と価値を判断しなければならないということである。

人は対話なしに、つまり同じ作品に対する他者の見方を考慮に入れることなしに、自分の経験に疑問を投げかけることはできない。対話こそが自分自身の経験の傾向に疑問をもたせ、その意義の理解を促すと考える。

アートは真実を伝達するものというよりは、問いを喚起する方法として重視される。

心理学的に進歩しているといえる点は、通念に対して疑問を呈する能力とそれらに答えることが可能になる点である。

美学的に進歩である点は、それが鋭敏な反応を可能にし、伝統的な予見が誤った方向に導く場合もあることに気づくことができる。人は創造と鑑賞という二つの芸術体験を、共通した場における自己の絶え間ない再検討と調整として適切に理解するのである。

(HOW WE UNDERSTAND ART,1987 より 訳・編集/上野行一)

○ハウゼンの美的発達の5段階

同時期、アビゲイル・ハウゼン (Abigail Housen) もまた多くの被験者にインタビューし、その反応を美的発達の5段階にまとめている。最初期のそれは博士論文の中で示されたものだが、その後も修正を繰り返しており、自らが関わるVUEというサイトに最新版が掲載されている。VTSの基礎になった博士論文とサイト掲載のものを翻訳編集したものが以下の表である。パーソンズの美的経験の認知発達の5段階との類似がみて取れる。

*アビゲイル・ハウゼンは長い病気の末亡くなったと、2020年8月15日に盟友フィリップ・ヤナワインが報じた。75歳だった。

ハウゼンの美的発達の5段階説

第1段階：「説明する観衆」(Accountive Viewers)

第1段階の説明する観衆は、物語の語り手である。自分の感覚や記憶、および個人的な連想を用いて、美術作品に関する個別の観察をおこない、それを物語にする。作品の評価は、作品に表現された彼ら自身が知っているものや好きなものに委ねられる。自分自身が作品の中に入り込み、そこで展開されている物語の一部になったかのように、彼らの解説は感情に彩られている。

第2段階：「構築する観衆」(Constructive Viewers)

第2段階の構築する観衆は、自分自身の認知力（直観）や自然の世界に関する知識、社会的・道徳的・因習的な世界の価値観によって、美術作品を理解するための枠組みをつくり出そうとする。もし作品が「思ったよう」でないならば、つまり技巧や技能、腕前や緻密さ、実用性や機能などが明白に見えてこなかったり、あるいはそれが不適當に見えたりすれば、「何これ？ヘンなの」と言ったり、欠陥があるとか価値がないとかと決めつけたりする。写実的であるかどうかということが、作品の価値を決める彼らの判断基準である。

第3段階：「分類する観衆」(Classifying Viewers)

第3段階の分類する観衆は、美術史家の分析し批判する立場をとる。彼らは作品のある場所や流派、様式や時代および由来について確認したがる。彼らは、出来事や人物に関するライブラリー—彼らが意欲的に広げたいと思っている—を使って作品を読み解く。適切に分類されれば作品の意味やメッセージは説明可能であり、合理的に解釈できると彼らは信じている。

第4段階：「解釈する観衆」(Interpretive Viewers)

第4段階の解釈する観衆は、美術作品との個人的な出会いを求める。彼らは作品の意味をゆっくりと解いていき、線や形、色彩の微妙さを味わう。いまや批判的技能は感情と直観による理解に使われ、この段階の観衆は作品に内在する意味やそれが象徴しているものを浮かび上がらせる。美術作品との新しい出会いのそれぞれが、新しい比較や洞察、体験の機会を提供する。この段階の観衆は、美術作品の独自性と価値は再解釈を受ける対象であることを知り、自らの鑑賞過程がチャンスと変化に従うものであることを悟る。

第5段階：「再創造する観衆」(Re-creative viewers)

第5段階の再創造する観衆は、美術作品の鑑賞と考察の長い歴史をもっている。なじみ深い絵画は古くからの友人のようなものである。すべからく友情にとっては時間が鍵となる要素であるように、第5段階の観衆はここに至って作品の生態学—その時間、その歴史、その課題、その来歴、その複雑さ—を知るようになるのだ。特定の作品によって自分自身の歴史を導き出し、そして一般的な見方とともに、この段階の観衆は個人的な考えをより広く普遍的な関心事を包括した見方とを結びつける。この地点で、記憶は絵画の地表にしみ出し、個人的特性と一般的特性が複雑に結合されるのである。

(A Brief Guide to Developmental Theory and Aesthetic Development, 2001 より 訳・編集/上野行一)